

トカラ列島小宝島海賊伝説

原田 信之
(日本文学)

鹿児島県トカラ列島的小宝島には、海賊に関する伝説が伝えられている。島の伝承によると、昔、与助・与太郎・甚之助という三人組の海賊たちがやってきて掠奪行為を働いたが、島の人たちは畝神山の所にある穴に隠れて助かったという。島で聞き取り調査を行うと、現在でも「畝神の隠れ穴」「与助にさらわれかけた子」「与助から逃げた人」「与助が焼いたセシリ堂」「与助の最期」など多数の関連伝説が伝えられていることが確認できた。与助は実在した海賊だったとみられ、『島津家列朝制度』や『三国名勝図会』には、弘治(一五五五〜一五五八)・天正(一五七三〜一五九二)の頃、日向国より海賊与助らが兵船を仕立ててトカラの島々(七島)に年々やってきたが中之島で殺害されたと記されている。興味深いのは与助の殺害方法で、中之島の伝承では焼き殺したと伝えられているが、小宝島では落とし穴に落として生き埋めにしたと伝えられている。島の自然を背景にして語られる小宝島海賊伝説は、トカラの島々の自然や文化にまつわる諸問題を考察する手がかりを与えてくれる興味深い事例として注目される。

(キーワード) トカラ列島、七島、小宝島、中之島、海賊与助

はじめに

トカラ列島は薩南諸島のうち屋久島から奄美大島までの間にある島々をいい、有人島としては口之島、中之島、平島、諏訪之瀬島、悪石島、小宝島、宝島がある(昭和四十五年から臥蛇島は無人島)。江戸時代の地誌『三国名勝図会』巻之二十八「七島」の項に「七島とは、口島・中島・平島・諏訪瀬島・臥蛇島・悪石島・宝島、是なり、此諸島南海の中、遠近羅列して、一処にあらざれども、総名を七島といふ^①」とあるように、口之島・臥蛇島・中之島・平島・諏訪之瀬島・

悪石島・宝島(小宝島を含む)を七島(しちとう)とよび、現在は鹿児島県鹿児島郡十島村(としまむら)に属している。三島(または上三島。硫黄島・竹島・黒島。現三島村)に対して七島(または下七島)とよばれた。近世には七島の口之島・中之島・宝島に津口番所・異国船番所・異国船遠見番所が設置されて鹿児島藩庁から在番が派遣され、七島各島には島民の中から任命された郡司が置かれ七島郡司と呼称された^②。

このトカラ列島の島々には海賊伝説が伝承されている。昔、与助という海賊

がやってきて、人さらいや掠奪をしたという。トカラ列島中之島には、与助岩という巨岩があり、その岩は海賊与助にまつわるものとして中之島ではよく知られている。中之島の伝承によると、与助は与助岩のところで焼き殺されたが、死ぬ時にブト（ブヨ）になって血を吸ってやると言い残したといい、それで降中之島ではブトが多くいるという⁽³⁾。

海賊与助はトカラの島々を掠奪してまわったといい、小宝島にも海賊与助に關する伝説が伝えられている。

小宝島は宝島の北東約十五キロにある隆起珊瑚礁に囲まれた周囲五キロ弱、面積一平方キロの島で、温泉も湧出し、南西部に小宝島港、北東部に城之前漁港がある。近世には鹿児島藩船奉行の管轄下、宝島に宝永（一七〇四）一七一（一）頃に津口番所、寛政元年（一七八九）に異国船番所・異国船遠見番所が設置され、派遣された在番は宝島・小宝島を管轄し、在番の指示の下で宝島郡司が浦役を兼ねながら島政にあたったとされる⁽⁴⁾。

本稿は、現地で採集した口承資料などの検討を通して、小宝島の人々の間で語り継がれてきた海賊伝説についてまとめ、南西諸島の伝説の一側面を考察することを目的とする。

1 日向国油津の海賊与助

まず、与助という海賊について検討してみることにする。中之島や小宝島の伝承によると、与助は日向国からやってきたという。

文政（一八一八～一八三〇）初期成立の鹿児島藩の法制経済史料集『島津家列朝制度』に、トカラ列島の海賊について次のような記述がある（傍線および丸括弧内注記原田）。

弘治・天正之年号之比、日向国より悪党共数船之兵船を仕立、年々参り、島々之有もの女童共押取、段々狼藉仕、島々及難儀、右悪党共、七島之内にて皆共打取、其節之為御褒美、具足・甲・鎧・長刀拝領被仰付、中之島郡司所持仕候、且又、右悪党共墓所等、右島へ有之候。／（略）／明和七

年（一七七〇）寅八月 六島郡司⁽⁵⁾

『島津家列朝制度』のこの記述は、明和七年（一七七〇）寅八月に六島郡司が薩摩藩に報告した文書中の一節である。この記述には、弘治（一五五五～一五五八）・天正（一五七三～一五九二）の頃、日向国より悪党たちが数船の兵船を仕立ててトカラの島々（七島）に年々やってきて、島々の物や女性・子どもなどを強奪して狼藉を働くので島々は難儀し、悪党たちを七島内で皆打ち取ったこと、その時に褒美としていただいた具足・甲（かぶと）・鎧（やり）・長刀を中之島の郡司が所持していること、悪党たちの墓所等が中之島にあることが記されている。『島津家列朝制度』のこの記述では、「悪党共」が「日向国」からやってきたとあるのみで、海賊たちの名前は記されていない。また、中之島にあるという悪党たちの墓所がどこを指すのか良くわからないが、中之島で海賊たちを焼殺した場と伝えられている「与助岩」のことをいっているのではないかと推定される。

『三國名勝図会』卷之二十八「中之島」の項には、海賊について次のような記述がある。

日州油浦人の侵掠 天正の比、日向国油浦より、東与助・渡邊甚之助・黒木与太郎、兵船数艘に乗て、七島へ渡海し、男女財物を掠む、土民等大に患ふ、中島に於て、郡司日高太郎左衛門有益といへる者、其賊を討て是を誅す、本府其功を賞して、鎧三領・鎗三本・眉尖刀一本を、有益に賜ふて、褒賞せらる、其家今に是を伝ふ⁽⁶⁾。

『三國名勝図会』は天保十四年（一八四三）に成立した薩摩・大隅・日向三國の地誌である。なお、これを典拠としたとみられるほぼ同文の記事が明治時代初期に編纂された地誌『薩隅日地理纂考』に収載されている⁽⁷⁾。この部分には、天正の頃に日向国油浦（『薩隅日地理纂考』は「日向国油津」）から東与助・渡邊甚之助・黒木与太郎が兵船数艘に乗って七島に渡海して男女財物をかすめ取ったため島の人々が非常に苦しめられたこと、中之島の郡司日高太郎左衛門有益がその賊を討ち取り、本府（『薩隅日地理纂考』は「国主」）がその功績を賞し

て鎧（よろい）三領、鎗（やり）三本、眉尖刀（びせんとう）一本を有益に与えてほめたたえたこと、その家に今もこれらが伝えられていることが記されている。

『三国名勝図会』（およびそれを引用した『薩隅日地理纂考』）には、海賊の名前が東与助・渡邊甚之助・黒木与太郎であること、海賊たちは日向国油浦（油津）から来たこと、海賊を討ち取ったのが中之島の郡司日高太郎左衛門有益であったことなど、先にみた『島津家列朝制度』にはない情報が記されている。

海賊たちがそこから来たという日向国油津には、油津湊（あぶらつみなと）という有名な良港があった。日本歴史地名大系『宮崎県の地名』によると、油津湊は現在の宮崎県日南市油津にあり、近世には飢肥城下の外港の役割を果し、飢肥領四浦と称された油津湊、大堂津、目井津、外浦の四浦のなかでも油津湊が最も賑いをみせ、湊に面して町場も発達していたという。湊の規模は東西十町・南北十一町四十間、深さは干潮時に四仞三尺、満潮時に六仞ほどで、湾口が南に面するため、北風には強いが南風に弱く、七月・八月頃に強い南風が吹く兆しがあると、あらかじめ外浦港に廻船したそうである。また、元禄十四年（一七〇一）の飢肥領国絵図控には約百艘の大船を繋ぎ、「日向地誌」には一年間の船の出入りは約二五〇艘とあることである⁸。また、『宮崎県の地名』の「飢肥」の項に「室町・戦国期には地内の飢肥城（南北朝期の築城という）が島津氏の日向国南部経営の拠点となり、同城やその城付地を飢肥あるいは飢肥領とよぶことが多くなる」「飢肥から櫛間（現串間市）に至る港湾は海上交通の要地として海賊の拠点ともなっていた」とあるように戦国時代の日向国の港湾は海賊たちの拠点となっていたようで、与助たちは日向国油津湊からトカラの島々に行っていたらしいことがわかる。戦国時代の日向国油津湊が海賊の拠点であったことや、『島津家列朝制度』や『三国名勝図会』および『薩隅日地理纂考』に記述が見えることから、トカラ列島を荒らしまわった後に退治された海賊与助の事件は史実であったようである。

II 小宝島の与助伝説

では次に、現在の小宝島に伝承されている海賊与助の伝説をみてみることにする。『十島村誌』に、小宝島の「古老に聞いた話」として、次のような話が紹介されている。

或る日、海岸に海賊船らしきものが近づいて来るのを発見した島の人は、大切な金銀や宝物、それに食糧、来年の種などを土に埋めたりして、かねての畝神山避難洞窟の中にかくれた。島に一人の少し知恵遅れの子供がいた。島人たちはその子供に、海岸の方へ行き海賊に会うように指示した。海賊たちはその子供を見付けて、あれやこれやと尋ねたが要領を得ず、島人たちの隠れている洞窟もわからず、集落を荒すだけ荒して引揚げた。島は子供のお陰で助かったのである¹⁰。

この話では、小宝島に海賊が来た時、知恵遅れの子どものおかげで被害にあわずにすんだという内容になっている。人々は金銀や宝物、食糧、来年の種ものなどを隠して畝神山避難洞窟の中に隠れ、知恵遅れの子どもに海賊に会うように指示したという。小宝島で調査したところ、知恵遅れの子どもの話は聞くことができなかつたが、同様の話は聞くことができた。以下、小宝島で採集した話を紹介しながら、検討してみたい。

〈事例1〉海賊与助・与太郎・甚之助と隠れ穴

海賊じゃった。与助・与太郎・甚之助って三人兄弟海賊じゃったらしい。そう言うてましたよ昔の人は。三兄弟。海賊。だからそれが来た時には皆その穴に行つて隠れた。そこはヤブ（藪）だったから。ちょこつと上がつて来ても、そこに隠れているってことさえ、捜し出さん。穴の名前は無い。私なんかは聞いていない。穴の名前は聞いてない。それはとにかくその時の、隠れ家。

空襲の時はその穴にみんな隠れました。でも今思えばな、爆弾一個落とされればみんな生き埋め。入り口は小さい。奥はずうつと広い。真っ暗ですよ、明かりを点けんといたら¹¹。

〈事例1〉「海賊与助・与太郎・甚之助と隠れ穴」は、海賊たちが来たので

穴に隠れたという語りである。この語りで興味深いのは、海賊の与助・与太郎・甚之助が三兄弟だったと昔の人が言っていたという部分である。中之島で調査すると、「与助岩」とからめて海賊与助の名前は語られているが、与太郎や甚之助の名前を語る人は一人もいなかった。ところが、小宝島では与助・与太郎・甚之助という三人の海賊の名前が語られ、しかも三人は兄弟だったという。海賊たちの名前がいつから小宝島で語られるようになったのかは不明であるが、与助たちが来たという弘治（一五五五～一五五八）・天正（一五七三～一五九二）の頃からは考えにくいので、天保十四年（一八四三）成立『三国名勝図会』や明治時代初期成立『薩隅日地理纂考』に「東与助・渡邊甚之助・黒木与太郎」という海賊たちの名前が記された後、それを讀んだ人が島の人たちに語り、それから三人の名前が具体的に語られるようになったのではないかと推定しておきたい。

〈事例2〉 畝神の隠れ穴

その与助・与太郎のその穴には、まあそうやって海賊が来るというんで、女子どもをあそこへ隠したと言われているんですね。海賊が、来る。みんな逃げる。みんな逃げろですよ、要するに。ほいでああゆうほら、立神（たちがみ）の下のほら穴なんというの誰もわからない場所じゃない。それは隠れ家だったと言われている。私も子どもの頃何回か入ってますけど、今は入れないほどヤブ（藪）になってる。だからね、誰も行かない近づかない所はヤブになるんですよ。あの大岩屋（おおいわや）の穴だけですよ、あんなに、堂々と開いて、やってるのは。平家の隠れ家だけです。（与助・与太郎から逃げた穴があるのは）畝神のふもとです。そして、山手側です。入り口は一メートルそこらですよ。深さは深いです。二、三十メートル。入り口はそれだけ。だから大岩屋と一緒です。こう広がってる。今もその状態であるかどうかは、私も、ここ二、三十年見ません。水はあそこはたぶん入っていかないと思いますけど。まあ緊急避難場所です。¹²⁾

〈事例2〉「畝神の隠れ穴」は、海賊与助から逃げるために畝神山のふもとに

ある穴に島の人々が隠れたという語りである。（事例1）の話者によると、島の人たちが隠れたという穴には名前がないそうである。この穴について、『十島村誌』の「畝神洞穴」の項に「島の東南南か南にある畝神山（うねがみやま）の下に、その洞穴はある。この洞穴を畝神洞穴という。畝神とは、この島だけの特定の固有名詞ではなく、十島村の各島々にある根神山のことで、島の守護神の山の意である¹³⁾」と記されている。（事例1）の話者以外の人に聞いても穴に名前はないということであったので、畝神山の下にある穴ということで『十島村誌』をまとめる際に便宜的に「畝神洞穴」として記したものとと思われる。与助から隠れたこの穴に、第二次世界大戦の空襲の時にもみんな隠れたという。土地の方に案内してもらってこの穴に入ってみたが、確かに入口が分かりにくい洞穴であった。『十島村誌』の「畝神洞穴」の項の「図33 畝神洞穴の測定¹⁴⁾」によると、この穴は奥行約二十メートル、幅約十メートル、入口付近の高さ約二メートルということであるが、現在は土が入って大分埋まっていた。（事例2）の話者が語っている「平家の隠れ家」というのは、小宝島港に上陸して真っ直ぐ行っただころの突き当たりの岩にある洞穴で、「平家大岩屋」と言われている。この大洞穴は、昔平家の落人たちが隠れ住んだ岩屋だと伝えられている。¹⁵⁾ 畝神のふもとにある洞穴は分かりにくい場所にあるが、「平家大岩屋」は分かりやすい場所にある。

〈事例3〉 与助にさらわれかけた子

子どもがな、その船が来たらみんな隠れないかんから。大きな船だからボートで下りて来よったんだろ。その人たちは沖に船はある。いうたらその船が来れば、誰かが見れば、「みんな来た」って言うて村中に知らせるから。子どもが一人、親が、「昨晚浜でいよる」と呼びに行きよったって。そいたら、そこで捕らえられて。昔ヤブ（藪）じゃったんだって。今みたいなあれじゃなかったって。して大きなススキの株があったや、子どもと、そいだ中に丸めて、そん中に子どもを入れて、ススキをこうやって縛って。帰りに連れて行くから、そいだ中へ結わえて。そして帰りに、その子どもが気付いて、「どっかこの辺じゃった」。

その子どもが丸々してる。そこを踏んだり登ったりすると、その子は黙あつて。とうとう捜し出さんで帰ったらしい。その子が言うんだ「怖かった。自分の頭の上を踏んで、過ぎて。黙っていらした」。黙つちよらんよな。そして後から親は、「子どもがおらん」。みんなで捜したんだつて。へたらそのススキの中に結わえて、その子。へでこの島の人は誰も捕られんじやつた。人も捕つて行きよつたんじや。それは、親父から聞いた話¹⁶⁾。

〈事例4〉与助にさらわれかけた子

畝神(うねがみ)の下に、穴があるのは確かです。与助・与太郎というのはいわば海賊ですね。それで春と秋というのかな、北風で下りてきて南風で上るという、その時期に、まあ人さらいですよ。財産、要するに穀物なのか。金銀はたぶん小宝島にはなかったと思う。穀物であつて、人さらいですよ。子どもだけさらつて行つたのか、女子どもさらつて行つたのかつていう記録はないんですけど。ただ、言い伝えに言われているのは、子どもをさらつたと。それをですね、その場所——はどの辺にあるんかね、今、牛舎があるあの辺なるんかね。——は、ススキの原で、そのススキというのは非常に大きなススキだつた。その子どもをですね、ススキの中に置いて、結わえて、逃げないよ、逃げられないよ、結わえて、帰りに、その子を、連れて行こうと、いうことで、島に来て、島にまあ部落に上がつて来てですね、そして、その掠奪を終わつて帰ろうと思つたら、子どもを閉じこめたススキがどれだつたかわからなくて結局、連れて行けなかつた。その子は助かつたという言い伝えはある。

それを聞いて思うのに、相当大的なススキの葉だ。まあそれ、今山に登つたらそれが何となく理解できるんですけどね。背丈以上のススキが生えてるんですよ。そういう状態だつたのかな。今、牧場地区、今日行かれましたか。あそこね、あんなに開けてなかつたんだよ。木があつたんですよ。つんの木といわれるね。木が生えて、それで、木と、木が、まあどういふふうに生えていたか。ただ海岸線は、もっとと、山手まで木が迫つてたつていうのは記憶あるんですよ

どね。木が生えててススキが生えてたと、言われている。だいぶんだから地形が変わつてるんですよ。まず木が無くなつた。私に言わすと。木がもうずっと海岸線に押しやられて。そして、山手も無くなつたということ。(木は昭和四十年代頃には)もう少なくなつてました。ススキの原というのがなかなか理解できない。僕らの年代では。ただ山に登るとススキがいっぱいあるんだよね。ああ、この中のどつかにこう子どもを閉じ込めて、行つて、帰りまたそのススキをかき分けて帰ろうとしたら、もうちよつと道一つ十メートル違つたら、ちよつと捜せないかなみたいなのは、分かる¹⁷⁾。

〈事例3〉〈事例4〉「与助にさらわれかけた子」は、海賊与助が小宝島に来た時、一人の子どもが逃げ遅れて捕まつた。海賊はその子を掠奪後に連れて帰ろうとススキに結わえておいたが、結わえた場所が分からなくなつて子どもは助かつたという話である。

先に、小宝島の「古老に聞いた話」として、海賊が来た時小宝島の人たちは畝神山避難洞窟の中に隠れ、知恵遅れの子どもに海賊に会うように指示して全員助かつたという話が『十島村誌』に紹介されていることを述べたが、島で行つた調査では知恵遅れの子どもの話を聞くことができなかった。しかし、『十島村誌』の話も〈事例3〉〈事例4〉「与助にさらわれかけた子」の話も、一人の子どもだけが海賊と遭遇し残りの島民たちは穴に隠れて助かつたという内容であることから、両者は同じ事件を語っているものと推定される。伝承される中で異なる語りが生じてきたのであろう。

〈事例4〉の話者がここ数十年で地形が変わり木が無くなつたと述べているように、小宝島は戦後大きく島の様子が変わったようである。与助の時代の小宝島の様子を知る手がかりになる明治時代の報告が残っている。

笹森儀助(一八四五—一九一五)が大島島司であつた明治二十八年四月から八月まで川辺郡拾島を巡回した際の日記『拾島状況録』の「宝島記」に「小宝島周回三十一町ニシテ、珊瑚礁ノ海面ヲ掩フ事本宝島ニ於ケルカ如シ。島ノ中央ニ当リ、東西ニ稍長キ丘陵アリ。蕩竹繁茂シテ、土人ノ耕地其上部ニ点在ス。

周囲港湾ナシ。土人ノ出入ハ村西五六町ノ処少ク珊瑚床ノ低所アリ、レレヨリ出入シ、且船ヲ曳揚ク。之ヲツクヒ泊ト云フ。ノ亦北面ニ淵泊アリ。南西村西ニ三浦泊アリ。皆風位ニ依リ出入スル処タリ。」(第一編第一章)、「小宝島、山林ナルモノナク、唯全島珊瑚盤層ニアラサル部分ハ簗竹ト海辺ニアダムノ生スルノミ。村落ノアル処枇杷ノ大樹数百本アリ。又榕樹アルノミ。耕地ハ丘上ト村ノ東部ニアルヲ視ル。」(第一編第二章)¹⁸⁾と記されている。

現在の小宝島には牧場もあり木があまりないが、笹森儀助が明治二十八年に見た小宝島には珊瑚盤層以外には琉球竹とアタンの木が生え、村落のある場所には枇杷(檳榔樹。ヤシ科の常緑高木)の大樹数百本や榕樹(ガジュマル)が生えていたことがわかる。また、島の周囲に港湾がなく、珊瑚床が低い所など数カ所を風位によって利用して船の出し入れをしていたようである。ここの「ツクヒ泊」が現在の小宝島港、「淵泊」が現在の城之前漁港かと推定される。与助が来た時の島の状況は、明治二十八年に笹森儀助が見た島の状況と大差はなかったとみてよいであろう。海賊たちは大きなススキにさらった子どもを結わえたが、琉球竹やアタンの木などが一面に繁茂したなかで子どもを結わえた場を見失ったということなのである。そして、明治時代の笹森儀助と同様に、与助たちは風位によって珊瑚床が低い所を適宜利用して島に上陸したものと考えられる。

〈事例5〉与助から逃げた人

小宝は、誰も盗まれなかった。一人だけ、連れて行かれて。そうしたら、船を出して。大人だったみたい。そしたら、「そこはちょっと、潮の流れが悪、い所だから、そこは、カジ(舵)は、私がとる」、捕られて行きよった人が。それで、沖の瀬の、おおせの、あの辺で、カジ(舵)を切って、船は宝の方に向けて、自分は飛び込んで、逃げた。ようあそこで、カジをそんな風に切って船遭難しなかったね。そして泳いで、逃げ延びて来た。すごい泳げる人でね、泳ぎが達者であったんだ。そこは潮の流れが速いとこだった。そんなただ大まかな、あの辺に。今のヘリポートの下。この島の。「ここは潮の流れが速いから、カジ

は私がとる」って、言つて。よっぽど、度胸のある人だったんだろう。¹⁹⁾

〈事例5〉「与助から逃げた人」は、大人が一人海賊に捕まって船に乗せられたが、潮の流れが悪い所だからと言つて自分が船のカジをとり、沖の瀬でカジを宝島の方に切つて自分は飛び込んで小宝島に泳いで逃げて助かったという話である。小宝島のヘリポートは小宝島港の北方にあるが、そのヘリポートの沖の方は潮の流れが速いところだという。

『三国名勝図会』卷之二十八「七島」の項に「薩摩地方より南島琉球へ往来するには、必ず七島海を過ぐ、七島海とは、屋久島より大島までの中間をいふ、七島其中間にある故なり、北海東西七十里許の間、波浪殊に高く、潮水常に東に注ぎ、迅速なること急流の如し(中略)、琉球常路の舟師等、謂く七島海甚浅し、是海底の地勢高く起りて、南北一脈相連ること、地上に山脈相連るが如し²⁰⁾」と記されているように、七島海は海水の流れが速いうえ海が浅いので、昔から七島海全体が難所として知られていた。〈事例5〉の話者は小宝島と宝島の間は潮の流れが速いところがあると語っているが、笹森儀助『拾島状況録』の「宝島記」に「島ノ東方大凡三里許ニ当リ小宝島アリ。土人之ヲ島子ト云ヒ、其距離ヲ五里ト称ス。其間潮流急劇舟行遅キカ故ニ、此称ヲ来タセリト云フ²¹⁾」と記されているように、実際に宝島と小宝島の間は潮流が急激で舟の進行が遅くなる難所のようなのである。〈事例5〉では、潮流が急激な宝島・小宝島間の中でも特に難所とされる場所での出来事として語られていることがわかる。〈事例5〉の話者によると、小宝島と宝島の間は、今は「フェリーとしま」で三十分だが、昔は帆と手こぎなので二時間から三時間かかったそうである。

先にみた〈事例3〉〈事例4〉「与助にさらわれた子」は子どもが一人さらわれたが助かったという話であったが、〈事例5〉「与助から逃げた人」は大人が一人捕まったが海に飛び込んで逃げて助かったという話で、結局、小宝島では誰もさらわれずにすんだと伝えられているようである。

〈事例6〉与助が焼いたセリ堂

(セリ堂)あそこには、何か堂があったらしい。何が、神様か知らんけど。ちゃ

んと、あれを作って、お堂があったみたい。「道」って書いてたよ、センリ道（みち）。台帳にはそう書いてある。そこにあつて、みんながお参りしてた。それも与助・与太郎が焼き払っている。何回来ても何も取られんで腹が立って、与助・与太郎が焼き捨てて行つたって言よつたよ。それでも、それ以来、建てなかつたってお堂。

堂に、何を祀つたのか知らんけどまあ、神様だったんだろやっばり何かそのな。知らんけど、与助・与太郎が焼き払って、行つた。何かそこにああしちよつたもんも、納品も皆持つて行つたみたい。取つて行つたみたい。²²

〈事例6〉「与助が焼いたセンリ堂」は、何回小宝島に来て何も取る事ができなかった与助・与太郎が怒つてセンリ堂というお堂にあつたものを全部取つてお堂を焼き払つて行つたという話である。本来はそこに何らかの神を祀るセンリ堂というお堂があつたが、与助・与太郎が焼き払つた後には再建されなかつたということである。現在、「せんりどう」と呼ばれている地にはコンクリートで小さい祠が作つてあり、地籍図には「センリ道」と表記してあるという。おそらく、地籍図に「せんりどう」という呼称を記入する時に「堂」と音が共通する「道」の字を間違つてあてたものと推定される。

小宝島は小さい島であるが、島全体に多数のお宮がある。それらをすべて拜んでまわるのが大変ということで、昭和四十六年に小宝神社を作つて十のお宮を合祀した²³。小宝神社に合祀されている十のお宮は、中島神社、いなご宮、孝坂神社、森の宮、神壇神社、十柱神社、御宮、岳の御神、河宮、ごんげん（権現）で、その中にはセンリ堂は入っていない。なお、元々お宮があつたそれぞれの場所には、今でも小祠が残されている。小宝島のセンリ堂に関しては、『十島村誌』に「村の近くにはセンリ堂、権現がある。島を神々が取り巻いて守つているのである²⁴」と記されている。

III 与助の最期

海賊与助は中之島で殺害されたようであるが、興味深いことに、中之島で語

られている与助の最期と小宝島で語られている与助の最期が異なっている。中之島では与助を与助岩のところまで焼き殺したと伝えられているが、小宝島では焼き殺したとは伝えられていない。次に小宝島で語られている与助の最期についてみてみることにする。

〈事例7〉与助の最期

（落とし穴の）その上に家を作つて、酒を飲まして、さあもうええ頃合いじやいうて。あれは落ちるよりに作つてたみたい。ほんでそこに落としたい。穴に。穴に落とし埋めたのよ。（埋めたのは）中之島つて。だからもう、毎年毎年そうやっていじめられる。今度は隠れているよりも、こつちから迎えに行つて、そうしようつて。頭いい人がいたんだ、中之島には。ほいで、船がもう来る頃にはちゃんとそういう準備して待つて²⁵。

〈事例7〉「与助の最期」は、与助に毎年いじめられるので今度は隠れるよりこつちから迎えに行こうと決め、船が来る頃に準備して待ち、中之島で落とし穴を掘つてその上に家を作り、酒を飲ませて穴に落とし埋めたという語りである。与助・与太郎・甚之助の三人ともそこで殺されたということであつた。

〈事例8〉与助の最期

何か、落とし穴みたいな所に、だまして落としした。要するに、屋敷なり何なり、そこにこの、ほら穴を、ほら穴とか落とし穴を掘つていて、ほいでそこで酒を飲ませて、まんまと、してやつたりと、いうような感じで聞いてたんです。要するに落とし穴に落としした。だから後は上から埋めてしまったという。接待場所をあらかじめ、そういうその、落とし穴を、接待場所に、作つていて。また、春夏秋冬必ず来たらしいんですよ。北風と南風で。だから、もうこんな海賊に毎年、搾取されてたんじやかなわんということ、やつつけてやるぞということとそのわざわざ、そういう場所を準備してと、いうふうに、僕は聞いている。落とし穴だと聞いている。だから生き埋めにされたと聞いている。焼き殺されたとは聞いてない。落とし穴に落とししたら上から埋めるしかない²⁶。

〈事例8〉「与助の最期」は、北風と南風で春夏秋冬必ず来る海賊に毎年搾取

されてはかなわないということ、接待場所に落とし穴を掘って準備してだし、酒を飲ませて穴に落とし生き埋めにしたという語りである。(事例8)の話者に焼き殺されたと言われていないかを聞くと、焼き殺されたとは聞いていないということであった。

〈事例9〉与助の最期

与助・与太郎・甚之助、いう名前。三人よ。与助・与太郎・甚之助いうてお父さんが話しをしたがね。それは、どっか、宝島に来たんじゃない。宝島に来て、そしてしまいは、中之島で、何とかよ、私なんかの何か親戚の人がかかわっているらしい、それを退治したのは。穴掘ってね、穴掘って。宝島に来てね、何かあれ、泥棒して、何やかんや。忘れた本当に。与助・与太郎・甚之助という。甚之助は、宝島の人じゃない？ どの人か知らん。三人。三人組。兄弟かは知らん。グループじゃ。三人。与太郎・甚之助。どの人かは知らん。忘れた。それが、何か悪いことして。今度はあの、宝島でか中之島でか、穴掘って、それをその、大きな穴掘ってな、落とし穴作って退治するいうて。それは悪いことする人で、そうして、穴掘ってね、穴掘って、それが上にこうね、何かをしてこう踏んだらぽこつと落ちるようにして。どっかで、酒盛りしようとか何とかいうてだまして。して、帰り道とか何とかそこ通り道な、そういう落とし穴作って、落とし穴に落とし入れたって。何てか、そう話聞いたよ。それで、それでその、ああやっぱり中之島。それでその中之島にはブトがおるでしょう。それでそれをね、そこでほら、そういうことして、そしたら、そいが魂つてのは、バチ(罰)が来て魂やつてその、あれが、ブトが増えたって。ブトが、与助・与太郎の魂やつて、いうこと聞きようたですよ。⁽²⁷⁾

〈事例9〉「与助の最期」は、与助・与太郎・甚之助という三人組が悪いことをするので酒盛りしようとかだし、通り道に落とし穴を作って落とし入れて退治したところ、与助・与太郎らの魂がブトになり、中之島にブトが出るようになってたという語りである。(事例9)の話者に聞くと、与助・与太郎・甚之助は三人組で、三人が兄弟かどうかは知らないと語ってくれた。小宝島においては、与助・

与太郎・甚之助という三人がセットで語られているが、三兄弟という立場と三人が兄弟かどうかは知らないという立場の二つの説があることがわかる。(事例9)で面白いのは、中之島のブトの起源まで語られている点である。(事例9)の話者の親戚が中之島にいるそうなので、中之島でブトの起源の話聞いたのである。それにもかかわらず、(事例9)の話者が、与助は落とし穴で埋め殺されたという小宝島の伝承を伝えている点が興味深い。

中之島では与助岩の所に家を作って与助たちに酒を飲ませて焼き殺したという焼殺説が伝えられているが、小宝島では(事例7)〈事例8〉〈事例9〉のどの話者も共通して与助は酒を飲まされて落とし穴に落とされて埋められたと語っている。海賊殺害方法にどうしてこのような相違が生じたのかは不明であるが、小宝島では落とし穴殺害説が独自の伝承として伝えられてきたことがわかり注目される。

〈事例10〉「日向んジイから捕らるっど」

昔の人はそう言いよったよ。「子どもは海岸に行くな。日向んジイから捕らるっど」って言って。下船が来れば。ずらつと停泊しよったから。日向のジイから捕られるから、行くなって海端の。遊びに行くなって海岸に。この人たちが、そうして子どもを捕って行きよったもんだから、やっぱり代々、「日向んジイから捕らるっど」って。与助・与太郎は日向の人。⁽²⁸⁾

〈事例10〉は、昔の人は子どもが海岸に行こうとすると、「子どもは海岸に行くな。日向んジイから捕らるっど」と言って注意したという語りである。昭和二年生まれの(事例10)の話者が子どもの頃、発動船が沖にずらつと停泊していたそうで、子どもがさらわれかける事件も発生したそうである。そういうことから、親たちは子どもたちに、日向のジイから捕られるから海岸に遊びに行くなどと言って注意したという。海賊与助・与太郎たちは日向の人だったので、「日向んジイから捕らるっど」と代々子どもたちに注意してきたそうである。数百年前に日向から来て掠奪行為を働いた海賊たちに対する恐怖がいかに強いものであったかがわかり、興味深いものがある。

〈事例11〉与助と海賊キッド

その与助・与太郎は、与那国島、そこまで行って、海賊キッドと、交換しよつたという。人間やら宝物やら何でも持って行って、人間を捕らえてその人たちに売るわけよ。何かそんな話を聞いた。何かそんな親父がそんなこと言うてたよ。そこへ行って、そこまで行ってそれで向こうに売る。そういうこと。

そういう風に何でも捕って行きよつたつて。鍬でも鎌でも。あらゆる金具と。金物は何でも捕って、それでヘラも鎌も。その船が来る時期になれば、みんな穴掘って埋めて。種もね、麦やらアワ（粟）・キビ（黍）。それもみんな、カメ（甕）に入れて、掘って埋めて、保存しよつた。家があれば、何でも持って行った。捕られないようにみんな埋めた。畑に²⁹⁾。

〈事例11〉「与助と海賊キッド」は、与助・与太郎が与那国島まで行き、掠奪した人や物を海賊キッドと交換したという語りである。昭和二年生まれの〈事例11〉の話者の父親がそう言っていたそうである。〈事例11〉の後半部に、海賊たちが取って行こうとしたものと、それらを隠す方法が語られている。海賊たちは家にあるものは何でも持って行ったため、鍬・鎌・ヘラなどあらゆる金具と、麦・アワ（粟）・キビ（黍）の種もみんなカメ（甕）に入れ、掘って畑に埋めたという。具体的に生々しい語りなので説得力があり興味深い。

ここで語られている海賊キッド (William Kidd) は一六四五年頃に生まれ、一七〇一年に亡くなったとされる世界的に著名な海賊である³⁰⁾。一方、与助は弘治（一五五五〜一五五八）・天正（一五七三〜一五九二）頃にトカラ列島で海賊行為を働き、天正年間には殺害されていたとみられるので、海賊キッドが生まれた時には与助は半世紀以上前に死去しており、二人が会うことは不可能であることがわかる。一見すると荒唐無稽な伝承のようにみえるが、実はこういう伝承が生じた背景には、海賊キッドがトカラ列島の宝島に財宝を隠したという、昭和十二年に起こった海賊キッドの埋蔵金騒動が関係していると考えられる。昭和十二年二月四日外務省に届いたアメリカの探偵を名乗る人物からの手紙に、南西諸島の宝島に海賊キッドの財宝が埋めてであると記してあったそうので、この

ことが日本の新聞で報道されて騒動になったことがあったという³¹⁾。小宝島や宝島で調査中、その頃宝島に海賊キッドの財宝を求めて来た外国人がいたらしいという話をしてくれる古老もいた。宝島や近隣の島々では、その海賊キッド埋蔵金騒動をきっかけにして、〈事例11〉「与助と海賊キッド」のような話が世間話のなかから生成されていったものと推定される。新しい伝説の生成という点からみても興味深い事例といえよう。

結語

以上で、トカラ列島小宝島で語り継がれてきた海賊伝説に関する筆者なりの考察を終えることとしたい。

海賊与助たちは、日向国油津湊という戦国時代には海賊の拠点でもあった良港から、トカラの島々に何度もやってきて掠奪行為を働いたようである。小宝島で聞き取り調査を行うと、多数の海賊関連伝説が伝承されていることが確認できた。

現在の小宝島に伝承されている海賊伝説は、大きく五つの話種に分類することができる。

一つ目は畝神の隠れ穴と助かった子どもにまつわる話で、「海賊与助・与太郎・甚之助と隠れ穴」「畝神の隠れ穴」「与助にさらわれかけた子」などが語られている。「海賊与助・与太郎・甚之助と隠れ穴」と「畝神の隠れ穴」は、海賊たちが来たので畝神山のところにある穴にみんなが隠れて助かったという話である。興味深いのは、中之島では与助という名前のみ語られているのに対し、小宝島では与助・与太郎・甚之助という三兄弟の海賊だったと語られている点である。「与助にさらわれかけた子」は、一人の子どもが逃げ遅れて海賊与助に捕まりスキに結わえられたが、結わえた場所が分からなくなって子どもは助かったという話である（なお、この子どもは知恵遅れであったという伝承もあつたようである）。この伝説を理解するには与助時代の自然状況を検討する必要がある。笹森儀助『拾島状況録』によると、明治二十八年時の小宝島には珊瑚盤層以外

には琉球竹とアダンの木が生え、村落のある場所には檳榔樹の大樹数百本やガジュマルが生えており、島の周囲には港湾がなく珊瑚床が低い所など数カ所を風位によって利用して船の出し入れをしていたという。現在の小宝島には牧場もあり木があまりないのでスキ原のイメージは想像しにくい、笹森儀助『拾島状況録』の記述からかつての小宝島の自然状況を類推することができ、この伝説内容が納得できる。

二つ目は大人が一人海賊に捕まりかけた話で、「与助から逃げた人」が語られている。「与助から逃げた人」は、大人が一人海賊に捕まりかけたが逃げて助かったという話である。その人は海賊船に乗せられたが、潮の流れが悪い所だからと言って自分が船のカジをとり、沖の瀬でカジを宝島の方に切って自分は飛び込んで逃げて助かったという。潮流が急激な宝島・小宝島間の中でも特に難所とされる場所での出来事として語られていることが注目される。

三つ目はセンリ堂にまつわる話で、「与助が焼いたセンリ堂」が語られている。「与助が焼いたセンリ堂」は、海賊与助がセンリ堂というお堂にあったものを全部取ってお堂を焼き払って行ったという話で、島に多数あるお宮の一つに関する伝説となっている。センリ堂に何が祀ってあったのかはよくわからない。

四つ目は与助が殺害された時の話で、「与助の最期」が語られている。「与助の最期」は、海賊船が来る頃に準備して待ち、中之島で落とし穴を掘ってその上に家を作り、酒を飲ませて穴に落とし穴を掘って、与助・与太郎・甚之助の三人ともそこで殺されたという。中之島では焼き殺したと伝えられているのに対して、なぜ小宝島では埋め殺したと伝えられているのかは不明である。

五つ目はその他の話種で、海岸で遊ぼうとする子どもに注意する時の言葉「日向んジイから捕らるっど」、「与助と海賊キッド」が伝えられている。「日向んジイから捕らるっど」は、昔の人は子どもが海岸に行こうとすると、「子どもは海岸に行くな。日向んジイから捕らるっど」と言って注意したという語りで、数百年前に日向から来て掠奪行為を働いた海賊たちに対する恐怖がいかに強いも

のであったかがわかり注目される。「与助と海賊キッド」は与助が与那国島まで行き、掠奪した人や物を海賊キッドと交換したという話で、一見すると荒唐無稽な伝承のようにみえるが、昭和十二年に起こった宝島の海賊キッド埋蔵金騒動が関係しているとみられ、新しい伝説の生成という点から注目される。

小宝島の海賊伝説からは、島の地形（入り口のわかりにくい洞窟の存在、かつては港が無く低所から船の出し入れをした等）、植生（樹木やスキの生え具合等）、島の周囲の海流の状況など、島および周辺の自然の状況が伝説の成立に大きな役割を果たしていることがわかる。

本稿では、小宝島に伝承されている海賊与助をめぐる伝説を中心に考察してみた。与助が殺害された地とされる中之島に伝えられている海賊与助をめぐる伝説に関する考察は、別稿にゆずることとする。

〔注〕

(1) 原口虎雄氏監修『三国名勝図会 第二巻』（新潮社・一九八二）、九三三～九三四頁。

(2) 日本歴史地名大系『鹿児島県の地名』（平凡社）、「七島」「十島村」の項参照。

(3) 中之島の海賊伝説については平成二十七年年度奄美沖縄民間文芸学会鹿児島大会（於・鹿児島県歴史資料センター黎明館、二〇一五・八・一六）で「トカラ列島中之島の海賊伝説―与助岩とブトの起源―」と題して発表した。別稿を留意している。

(4) 日本歴史地名大系『鹿児島県の地名』（平凡社）、「宝島・小宝島」の項参照。

(5) 『藩法集』鹿児島藩 上（創文社・一九六九）、九二〇～九二二頁。

(6) 注1の『三国名勝図会 第二巻』、九四六～九四七頁。

(7) 『薩隅日地理纂考』（鹿児島県教育会、活字本明治三十一年・復刻一九七二）、三二八頁。

(8) 日本歴史地名大系『宮崎県の地名』（平凡社）、「油津湊」の項参照。

(9) 日本歴史地名大系『宮崎県の地名』（平凡社）、「飢肥」の項参照。

- (10) 十島村誌編集委員会編『十島村誌』（十島村、一九九五）、四九六頁。
原田調査、採集稿。
- (11) 話者は鹿児島県鹿児島郡十島村小宝島の女性（S2生まれ）。平成二十二年（二〇一〇）八月八日・原田調査、採集稿。
- (12) 話者は鹿児島県鹿児島郡十島村小宝島の男性（S25生まれ）。平成二十二年（二〇一〇）八月七日・原田調査、採集稿。
- (13) 注10の『十島村誌』、五五四頁。
- (14) 注10の『十島村誌』、五五五頁。
- (15) 注10の『十島村誌』、五五三頁。
- (16) 話者は注11の女性（S2生まれ）。平成二十二年（二〇一〇）八月八日・原田調査、採集稿。
- (17) 話者は注12の男性（S25生まれ）。平成二十二年（二〇一〇）八月七日・原田調査、採集稿。
- (18) 笹森儀助『拾島状況録』（『日本庶民生活史料集成第一巻』三一書房、一九六八、所収）、二七六～二七七頁。
- (19) 話者は注11の女性（S2生まれ）。平成二十二年（二〇一〇）八月八日・原田調査、採集稿。
- (20) 注1の『三国名勝図会 第二巻』、九四一～九四二頁。
- (21) 注18の笹森儀助『拾島状況録』、二七六頁。
- (22) 話者は注11の女性（S2生まれ）。平成二十二年（二〇一〇）八月十日・原田調査、採集稿。
- (23) 小宝神社の中に「昭和四十六年八月十日小宝島合社寄附者一覧」と記された看板があり、お宮の中にそれぞれのお宮の名前を記した十の木札が掛けている。
- (24) 注10の『十島村誌』、八〇七頁。
- (25) 話者は注11の女性（S2生まれ）。平成二十二年（二〇一〇）八月八日・原田調査、採集稿。
- (26) 話者は注12の男性（S25生まれ）。平成二十二年（二〇一〇）八月七日・原田調査、採集稿。
- (27) 話者は鹿児島県鹿児島郡十島村小宝島の女性（S6生まれ）。平成二十二年（二〇一〇）八月十日・原田調査、採集稿。
- (28) 日・原田調査、採集稿。
- (29) 話者は注11の女性（S2生まれ）。平成二十二年（二〇一〇）八月八日・原田調査、採集稿。
- (30) 『日本大百科全書ニッポニカ』（小学館）、「海賊キッド」の項参照。
- (31) 島山清行氏『日本の埋蔵金 下』（番町書房・一九七三）所収「キャプテン・キッドと宝島」参照。

〔付記〕

本稿は、日本学術振興会平成二十七年（二〇一五年）度～三十一年（二〇一九年）度科学研究費・基盤研究C・研究課題「南西諸島における自然説明伝説の調査研究」（課題番号15K02222）の成果の一部である。

連絡先・原田信之

新見公立大学看護学部 〒七一八―八五八五 新見市西方一二六三―二

（二〇一五年十一月十八日受理）